

本が人であることを示す 装丁家の仕事とコンテクト

ものを見、本というかたちを創り出していく記録の数々

本は物であるとは、本は人であるというのだ。一九世紀の詩人ハイネリヒ・ハイネは、「書物を焼くところでは人間を焼くことになる」と戯曲にしているが、「世紀後のナチスドイツはそれを現実にした。そして私たちは今日、さらに一世紀後の本をめくって生きている。」

本に関わるすべての仕事も、突き詰めれば、テキストにコンテクトを付与する作業」だと桂川氏はいう。

「職人とはかく物を見る」と指摘されていることに、はたと気づく。印刷の世界でいえば、デジタル技術は二進法の世界に「0か1か」の世界だが、印刷も基本的には無限の階調をアミ点に置き換える作業であり、突き詰めれば、本質的にはアナログとデジタルの差がない。ここで物のゆたかさは、事象の断片ではないデータではなく、無限の階調ももっている多様性である。職人は、この無限のゆたかさに畏敬の念を抱いているがゆえに物を見る。だが、物づくりのプロセスが職人の目から離れ、ブラックボックスに入れば入るほど、それは断片化されていく。畏敬の念もまた断片化し、希薄化する。

装丁家の桂川潤氏が書いた

本書は、本が人であることを

桂川氏は、読書は本場にコ

生きたコンテクトの編集

ふり返らせる。たしかに今日、物としての本はデジタル・テキストになりつつある。電子書籍の台頭は、桂川氏がいうように装丁はおろか、「物である本」の消滅をリアルなものにした。書物がその「身体性」を喪失していくプロセスが、一気に加速した。

「アナログか、デジタルか」「リアルか、ヴァーチャルか」を二者択一する時代ではない。わたしたちの生活は、すでにそのどちらにも抜きがたく根ざしてしまっている」と桂川氏はいふ。その現実感覚は、装丁家ゆえにいつも先鋭的である。DTPを使ってテキストの束を具体的に物やかたちに定着させ、本のたすまいを創るからである。

「テキストのみ」の電子ブックに対し、「物である本」は、テキストのみならず、豊かなコンテクトを伴っている」と桂川氏はいふ。たとえば、紙の本のマージン（余白）がそうだ。造本・装丁において、マージンの設定は、外装デザインに勝るとも劣らない重要なポイントだと桂川氏はいふ。「情報を含まず、一見ムダと思えないマージンの消滅によって、読書体験そのものがどう変質し、どんな情や息づかい、性格が変化するか」と。テキストを詰め込んだ本は読みにくい。ブックデザイナーは、そこにマージンを創り出すクリエイターだ。マージンは、作品世界と現実世界をつなぐ「橋掛かり」であると桂川氏はいふ。「あ

「装丁という仕事は、要はテキストに『身体性』というコンテクトを与えていく作業」といふ。装丁のみならず、編集や書籍販売など、

杉浦康平に師事したブックデザイナーの鈴木一誌に、本づくりのプロセスについて聞

いたことがある。鈴木は、薄塗りの共同作業に似ていると語った。本という物に向かう無限の階調に、そのプロセスに携わる各人が薄塗りを施していくと、階調はより細やかに、非断片的になる。本が物になるプロセスは、こうしておのずと著者のテキストがコンテクトとして編まれていく過程になる。

「テキストのみ」の電子ブックに対し、「物である本」は、テキストのみならず、豊かなコンテクトを伴っている」と桂川氏はいふ。たとえば、紙の本のマージン（余白）がそうだ。造本・装丁において、マージンの設定は、外装デザインに勝るとも劣らない重要なポイントだと桂川氏はいふ。「情報を含まず、一見ムダと思えないマージンの消滅によって、読書体験そのものがどう変質し、どんな情や息づかい、性格が変化するか」と。テキストを詰め込んだ本は読みにくい。ブックデザイナーは、そこにマージンを創り出すクリエイターだ。マージンは、作品世界と現実世界をつなぐ「橋掛かり」であると桂川氏はいふ。「あ

「装丁という仕事は、要はテキストに『身体性』というコンテクトを与えていく作業」といふ。装丁のみならず、編集や書籍販売など、

杉浦康平に師事したブックデザイナーの鈴木一誌に、本づくりのプロセスについて聞

いたことがある。鈴木は、薄塗りの共同作業に似ていると語った。本という物に向かう無限の階調に、そのプロセスに携わる各人が薄塗りを施していくと、階調はより細やかに、非断片的になる。本が物になるプロセスは、こうしておのずと著者のテキストがコンテクトとして編まれていく過程になる。

「テキストのみ」の電子ブックに対し、「物である本」は、テキストのみならず、豊かなコンテクトを伴っている」と桂川氏はいふ。たとえば、紙の本のマージン（余白）がそうだ。造本・装丁において、マージンの設定は、外装デザインに勝るとも劣らない重要なポイントだと桂川氏はいふ。「情報を含まず、一見ムダと思えないマージンの消滅によって、読書体験そのものがどう変質し、どんな情や息づかい、性格が変化するか」と。テキストを詰め込んだ本は読みにくい。ブックデザイナーは、そこにマージンを創り出すクリエイターだ。マージンは、作品世界と現実世界をつなぐ「橋掛かり」であると桂川氏はいふ。「あ

「装丁という仕事は、要はテキストに『身体性』というコンテクトを与えていく作業」といふ。装丁のみならず、編集や書籍販売など、

杉浦康平に師事したブックデザイナーの鈴木一誌に、本づくりのプロセスについて聞

いたことがある。鈴木は、薄塗りの共同作業に似ていると語った。本という物に向かう無限の階調に、そのプロセスに携わる各人が薄塗りを施していくと、階調はより細やかに、非断片的になる。本が物になるプロセスは、こうしておのずと著者のテキストがコンテクトとして編まれていく過程になる。

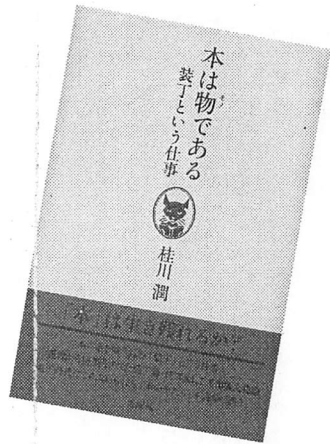
「テキストのみ」の電子ブックに対し、「物である本」は、テキストのみならず、豊かなコンテクトを伴っている」と桂川氏はいふ。たとえば、紙の本のマージン（余白）がそうだ。造本・装丁において、マージンの設定は、外装デザインに勝るとも劣らない重要なポイントだと桂川氏はいふ。「情報を含まず、一見ムダと思えないマージンの消滅によって、読書体験そのものがどう変質し、どんな情や息づかい、性格が変化するか」と。テキストを詰め込んだ本は読みにくい。ブックデザイナーは、そこにマージンを創り出すクリエイターだ。マージンは、作品世界と現実世界をつなぐ「橋掛かり」であると桂川氏はいふ。「あ

「装丁という仕事は、要はテキストに『身体性』というコンテクトを与えていく作業」といふ。装丁のみならず、編集や書籍販売など、

杉浦康平に師事したブックデザイナーの鈴木一誌に、本づくりのプロセスについて聞

いたことがある。鈴木は、薄塗りの共同作業に似ていると語った。本という物に向かう無限の階調に、そのプロセスに携わる各人が薄塗りを施していくと、階調はより細やかに、非断片的になる。本が物になるプロセスは、こうしておのずと著者のテキストがコンテクトとして編まれていく過程になる。

「テキストのみ」の電子ブックに対し、「物である本」は、テキストのみならず、豊かなコンテクトを伴っている」と桂川氏はいふ。たとえば、紙の本のマージン（余白）がそうだ。造本・装丁において、マージンの設定は、外装デザインに勝るとも劣らない重要なポイントだと桂川氏はいふ。「情報を含まず、一見ムダと思えないマージンの消滅によって、読書体験そのものがどう変質し、どんな情や息づかい、性格が変化するか」と。テキストを詰め込んだ本は読みにくい。ブックデザイナーは、そこにマージンを創り出すクリエイターだ。マージンは、作品世界と現実世界をつなぐ「橋掛かり」であると桂川氏はいふ。「あ



「装丁という仕事は、要はテキストに『身体性』というコンテクトを与えていく作業」といふ。装丁のみならず、編集や書籍販売など、